

第93回全国高校野球選手権大会出場記念

夢と感動を ありがとう

東京都市大学塩尻高等学校野球部

2011・夏 — 甲子園・熱闘の軌跡 —

学校法人 五島育英会





\\甲子園初戦ダイジェスト//

正々堂々と自分たちの野球を貫き、 強豪相手に最後まで食い下がった

長野県代表として初めての大舞台を踏んだ都市大塩尻高校ナイン。その注目の初戦は、大会7日目(8月12日)午前8時開始の第一試合となった。試合前のノックでは、各選手とも軽快な動きを見せ、初出場という堅さはあまり感じさせなかった。

対する相手は、大分県代表の明豊高校。夏の全国大会は2年ぶり4回目の出場で、過去3回出場のうち、2回はベスト8まで勝ち進んでいる強豪で、今年もプロ注目の逸材を中軸に据える強力打線が看板だ。「攻撃的な守備」を掲げる塩尻が、全国レベルのチームを相手にどう立ち向かうのかが注目された。

試合前半は互角以上の展開に、
スタンドの大応援団も沸き返る

まず先手必勝一。独特の張りつめた雰囲気漂う立ち上がり。先攻の塩尻は一回表、その雰囲気を払うように、先頭打者の吉田光佑君の鋭い打球が三遊間を破って、無死一塁。ここから一気に攻めていきたいところだったが、続く2番堤将大君の場面でエンドランを失敗。吉田君が二塁で刺され、先制機を逃した。

一方、塩尻の先発・相原雅君は、投球練習を見た新井監督も「今日はえらく落ち着いているなあ」というほどの上々の立ち上がり。走者を置いても落ち着いた投球で切り抜け、中盤まで強打の明豊打線に得点を許さなかった。

二回表の攻撃前に、甲子園に初めて都市大塩尻高校の校歌がこだました。地元の塩尻市や東京から、バス52台などに分かれて駆けつけた生徒、保護者、学校関係者、一般市民ら総勢約2,150人もの大応援団で一塁側アルプススタンド上段までぎっしり埋まり、身に付けたスクールカラーである水色のTシャツで、スタンドは鮮やかに染まった。この試合でベンチに入っていない野球部員たちが大きな声を張り上げて、この大応援団を引っ張る。そして校歌が流れると、それに合わせて応援団全員が両手で目の前にかざした白いタオルをゆっくりと左右に揺らす。あたかもそれは、大波小波がうねる大海原のようなスケールを感じさせた。

そのスタンドがひととき沸いたのが両チーム無得点で迎

えた四回裏。塩尻は一死二塁のピンチ。明豊は続く打者がライト前ヒットを放ち、二塁走者は三塁をけて、先制のホームを狙う。ここでライトの内藤渉太君からの矢のような送球が、本塁で構えるキャッチャー古谷拓幹君のミットにワンバウンドで吸い込まれる。あのイチローもびっくりの「レーザービーム」で、見事に走者を刺した。これぞ塩尻自慢の「攻撃的な守備」の本領発揮であった。

試合前半は、再三走者を出す塩尻がむしろ押し気味に試合を進めるものの、適当に荒れる相手投手をあと一步攻めきれず、得点を奪えない。それでも相原君の好投もあり、強豪相手に五回まで0-0とがっぷり四つ。接戦に持ち込み、後半勝負をかけたい塩尻の思惑通りの試合展開となった。

失点にも気持ちを切らさない。
貫いた塩尻野球

だが、全国レベルのチームはそう甘くはなかった。六回裏、ついに好投していた相原君が明豊打線につかまり、無死から連続長打で1点を先制される。続く打者はフルカウントからのスイングを空振りとしみなされ、三振の判定。これに「ファウルではないか」と明豊側からアピール。球審がキャッチャーの古谷君に確認したところ「バットに当たりました」と



「このホームベースだけは絶対に踏ませない!!」四回裏、ライトの内藤君からの好返球を受け、相手の本塁突入を阻止するキャッチャーの古谷君。『攻撃的な守備』を看板とする塩尻の、まさに本領発揮。



この瞬間を待っていた！ 試合前の挨拶に向かう選手たち

東京都市大塩尻

0	0	0	0	0	0	0	1	2	3
0	0	0	0	0	6	0	0	×	6

明豊

答えたため、塁審と協議の末、判定はファウルに訂正され、プレーは再開された。「正々堂々とプレーする」を貫くのが塩尻の野球。しかし、いったん火のついた明豊打線は攻撃の手を緩めず、相原君、さらにこの回途中からリリーフした金子豪君から大量6点を入れた。

だがこの失点にも塩尻ナインは気持ちを切らさなかった。以降は金子君、さらに八回のピンチにリリーフした3番手の高田裕也君が追加点を許さず、またバックも2つの併殺を完成させるなど、この試合では結局無失策。看板の堅い守備は、甲子園の大舞台でも存分に発揮された。

最後まであきらめない。 未来へ夢をつないだ終盤の猛反撃

応援してくれる多くの人たち、また長野大会で敗れていった他のチームのためにも、なんとか期待にこたえたい。その執念は、八回表ついに実り、この回先頭の7番久保田康也君、続く代打・吉田拓君に連続ヒットが飛び出す。この試合初の連打だ。金子君が確実にバントで送って、一死二、三塁とした後、1番吉田光君がライトへ犠牲フライを打ち上げ、ついに待望の甲子園初得点をもぎ取った。

そして粘る塩尻は、土壇場の九回表にも3つの四死球を

選び、二死ながら満塁と攻めたてる。ここで今日2安打と当たっている久保田君が、ファウルで粘ったあとの8球目を、セカンドへしぶとく内野安打。これでランナー2人が還って3-6、その差3点と詰め寄った。長野大会決勝でみせた驚異の粘りを再現させる展開に、一塁側アルプススタンドからは嵐のような大声援が飛ぶ。

だが、なおも続くチャンスは、九回途中からリリーフした明豊の二番手投手にかわされ、ゲームセット。塩尻の粘りも、勝利までは惜しくもあと一步届かなかった。

試合後、スタンド前に整列し挨拶する選手たち。スタンドからは「よくやったぞ、ナイスゲーム!!」「甲子園に連れてきてくれてありがとう」など、強豪相手に最後の最後まであきらめずに食い下がり、健闘した選手たちに惜しめない拍手と声援が送られた。

初めての甲子園で、持てる力を存分に発揮した塩尻ナイン。出場選手の中には1、2年生も数多くおり、今後に向けて大きな経験となったことだろう。この経験を活かし、再び甲子園に戻り、今回果たせなかった「甲子園での1勝」さらにその先への目標に向け、大きく飛躍してくれることを期待したい。



二回表の攻撃前、都市大塩尻高の校歌演奏に合わせて、掲げたタオルを揺らす大応援団。



「よっしゃあ〜！ イける!!」一回表、吉田光佑君がレフト前ヒットで出塁し、塩尻ベンチの氣勢も上がる(写真奥)。



「落ち着いて、しめていこうぜ!!」ピンチにマウンド上で励まし合う相原君と古谷君のバッテリー。



「頼む! 抜けてくれー!!」九回表二死満塁、久保田君執念の一打は、ランナー2人を迎え入れるタイムリー内野安打となる。



チーム全員がつないでもぎ取った!! 九回表、久保田君の内野安打で、二塁走者の小山君が3点目の生還。



「よくやったぞ!!」試合終了後、整列して挨拶する選手たちに、健闘を称えて大きな拍手と声援が送られた。

監督・部長・選手に聞く

甲子園を ふりかえって…



憧れの甲子園で記念撮影

第93回全国高校野球選手権大会に初出場した都市大塩尻高校。初めての大舞台にも臆することなく、正々堂々とした全力プレーは、私たちに大きな夢と感動を与えてくれました。

今回は野球部の新井監督、荻原部長、そしてベンチ入りした選手の皆さんの声を紹介しながら、甲子園での熱闘をふりかえってみました。

東京都市大学塩尻高等学校 野球部監督

新井 孝行 教諭

——明豊高校戦をふりかえっての感想は？

思っていた以上に、選手たちは落ち着いてプレーしてくれました。投手もよく投げていましたし、しっかり守って、なんとかチャンスを活かして後半に勝負をかけよう、というイメージも出ていた。それだけに6回裏の6失点は、もう少し何らかの手立てを出来ればもっといいゲームになったのではと心残りですね。

——チームには1、2年生も多く、貴重な経験になったと思うが？

本当に大きな経験になりました。特に試合の終盤8、9回の攻撃で3点を返したことは、今後につながるという意味でも大きいと思います。

——大会7日目ということでコンディション作りは難しくなかったか？

地に足がついてない状態で試合はやりたくなかったので、少し遅めの7日目で、練習も十分出来、ちょうど良かったと思います。

——今年のチームはどんなチームだったか？

荻原先生(部長)とも話しましたが、新チーム結成当初は正直「なんて弱いチームだ」と思っていました。エースも4番もいないようなチームが、ただそれぞれ個性ある子たちが一つにまると、これほど成長するのかと驚きました。今回の甲子園出場は私達の予想を超えたものでした。

——長野大会決勝や甲子園での戦いなど、最後まであきらめない姿勢が強く印象に残ったが？

野球は、最後の27個目のアウトを取られるまでは絶対にあきらめてはいけない、と常に言い続けて指導してきました。今年は特にそういった粘り強さを選手達がみせてくれました。

——スタンドを埋めた大応援団を見ての感想は？

試合終了後、スタンドに挨拶に行ったとき、あのブルー一色の応援団を見て感極まったというか、本当に感激しました。それだけに、正直勝たかったです。

東京都市大学塩尻高等学校 野球部部長

荻原 義正 教諭

——先生ご自身も選手として甲子園出場の経験があるが、それが今回のチームに活かされたことは？

自分の経験でわかる範囲のことは、実際に指導の中にも取り入れてきました。今回選手たちが肌で感じたことも僕が現役時代に感じたことと同じものであったし、それを今後、後輩達に伝えていくことが伝統あるチームになっていくことだと思います。また彼ら自身も今回の財産を今後の人生にも活かしてもらいたいです。

——選手は先生が担任しているクラスの生徒が多いようだが、教室とグラウンドでの選手の表情は違うか？

全然、違いますね。グラウンドでの姿勢を教室でも見せてくればいいのですが…(笑)。ただ選手同士仲が良く、チーム内の雰囲気は良いですね。そんな個性的なチームを、キャプテン(古谷君)が中心になってまとめ、結果、まとまりのあるチームになり、さらに今回の甲子園につながったと思います。



選手たちの声

(囲みの数字は全国大会での背番号)

1 相原 雅君(3年)

甲子園のマウンドは投げやすかったです。早く試合で投げたいという気持ちがあったので、緊張せずに落ち着いて試合に入りました。

2 古谷 拓幹君(3年)

(主将として) 試合間隔が空きましたが、ミーティング等で気持ちを切らさないように、チームをまとめました。全員が試合をしたいという気持ちが強くて、のびのびプレーが出来たと思います。

3 松原 航太郎君(3年)

グラウンドに立ってみて、すごく観客が多いなと感じました。打席に立った時など、ライトブルーの応援席は、すごく力になりました。

4 吉田 光佑君(2年)

とにかく塁に出ることを考えて打席に立ちました。(新チームでは主将となるが) 全国大会で勝てるチームを作って、絶対に甲子園に戻りたいです。

5 杉本 一平君(3年)

普段通りの気持ちで試合に臨もうと思っていました。(数多くの名選手もプレーした) 憧れのグラウンドだったので、そこでプレーできて貴重な経験になりました。

6 堤 将大君(2年)

2年生で甲子園に出場という大きな経験をさせてもらったので、来年は自分たちがチームを引っ張って、また甲子園に出場出来るように頑張りたいです。

7 久保田 康也君(3年)

普段通りのプレーをしようと思っていました。ファウルゾーンは意外と狭く、またスタンド全体が白く見えるので、飛球を捕球する時に気を遣いました。

8 笠原 秀太君(3年)

(長野大会のケガから復帰して) やってやろうという気持ちで臨みました。センターを守っていて、左中間、右中間は特に(グラウンドに) 膨らみがあって広く感じました。

9 内藤 渉太君(2年)

(4回裏のバックホームについて) 普段からああいう練習はしていたので肩には自信がありました。打球が飛んできた瞬間、絶対刺せると思って送球しました。

10 津山 拓海君(3年)

長野大会と違って、朝の試合なのに外野席にも結構人が入っていて、すごいなと思いました。あまり緊張はしないで試合に入ることが出来ました。

11 金子 豪君(3年)

(6回裏のピンチでリリーフ) 相手の勢いを止めようとマウンドに上がりましたが、難しかったです。ただそれで気持ちを切らさないように、しっかり投げました。

12 高田 裕也君(2年)

(8回裏からリリーフ) この後の味方の攻撃になんとかつながるようにと思って投げました。甲子園のマウンドは投げやすかったです。

13 小山 洋介君(3年)

試合開始からブルペンなどで試合を見守りながら、後半の出番に備えてバットを振って待機していました。甲子園は広かったです。

14 小松 勇介君(3年)

(一塁コーチとして) けん制球に引っかからないように、塁に出たら相手投手の足の動きをよく見るようにランナーにはアドバイスを送っていました。

15 外戸 祐輝君(3年)

相手は左打者が多いので、セーフティバントとかの仕掛けには気をつけるように声をかけていました。リードされても気を落とさないように盛り上げていました。

16 中島 啓太君(3年)

(三塁コーチとして) 打球の動きを見ながら判断して、正確な指示をランナーに送るように努めました。小さい頃からの憧れの球場でプレー出来てよかったです。

17 百瀬 雄太君(3年)

甲子園の雰囲気はすごかったです。とにかくベンチでは大きな声を出して、リードされてもあきらめなくて、チームを盛り上げようとしていました。

18 吉田 拓君(1年)

良い先輩たちと野球が出来て、1年生で甲子園のベンチに入れて、いい経験が出来ました。先輩達に教わったことを忘れずにこれからも頑張ります。

\\応援席ピンナップ\\

2000人を こえる大応援団が アルプススタンドを 水色に染めた!!

—さまざまな人が支えあった甲子園出場—

甲子園出場に当たって結成された大応援団は、塩尻高校の生徒・職員611名、塩尻市長はじめ塩尻市関連の方々43名、法人職員およびグループ系列校から450名、父母会260名、一般参加者750名となり、なんとバス52台、総勢約2,150名!! 1塁側のアルプススタンドは上段までスカイブルーに埋め尽くされ、熱い応援が繰り広げられました。

またチアリーダーには系列校の都市大等々力中高、ブラスバンドには地元の兵庫県立西宮今津高等学校の皆さんが応援に駆けつけ、暖かい交流の中で応援が行われたこともうれしい話題でした。ここでは、そんな熱気にあふれた応援の模様をご紹介します。



(上) スクールカラーの水色一色に染まったアルプススタンドは、試合前から熱気に包まれた。(下左) 野球部員による迫力の応援は、甲子園でも健在! 元気よく踊りながら、大応援団を引っ張った。(中右) アルプススタンドで応援する人々の背中には、最後まで粘る意思を表したチームスローガン「築け伝統、燃やせ夢への執念」の文字が。(下右) スリリングな試合展開を、固唾を飲んで見守る塩尻高の生徒たち。



(左上)応援席には、保護者の皆さんや地元の方の姿も。(左中)東京から応援に駆けつけた、五島育英会の安達功理事長(写真右端)、都市大グループの中村英夫総長(東京都市大学学長・右から2番目)も球場を訪れ、熱い声援を送る。(右上)塩尻高校吹奏楽部に加え、兵庫県立西宮今津高等学校の皆さんにも協力していただいた、総勢64名のプラスバンド。ぶっつけ本番のジョイントにも、驚くほど息がピッタリ。(左下、右下)急速結成された塩尻高校チアリーダーに加え、都市大グループの都市大等々力中高からもチアリーダー11名が応援に駆けつけ、試合に華を添えた。



こんな形での応援も…



(左)穂高神社の必勝祈願の護摩と、五島育英会関係者から贈られた鶴岡八幡宮の護摩。(中)地元塩尻駅に掲げられた、「祝 甲子園出場」の横断幕(右)東急グループも、グループ全体を挙げて応援。東京・渋谷にある東急百貨店本店、東横店(写真)には懸垂幕がかけられた。



中央が小口市長。また応援席には、地元塩尻市の矢崎国会議員、永田市議会議長の姿も。塩尻市からは、選手たちに新しいユニフォームも贈られた。

応援席の方からのコメント

塩尻市・小口利幸市長

塩尻市内の高校では、今大会での都市大塩尻高が初めての甲子園出場となります。学校にとっても塩尻市にとっても、やっと甲子園への入り口のドアが開きました。都市大塩尻高の野球部もこれからどんどん進化するでしょうし、それを私たちも後押ししていきたいと思っています。終盤のクライマックスで、一丸となって前を向き進んでいった結果得た3点が、今後に夢をつないでくれたように思います。今回の経験をバネに、これからもぜひ頑張っていたきたいと思います。

ご声援ありがとうございました

学校法人五島育英会

安達 功理事長

この度、東京都市大学塩尻高校野球部の甲子園大会出場に際しましては、地元塩尻市をはじめとする長野県の皆さま、日頃東京都市大学グループを応援いただいております皆さまの心温まるご支援をいただき、まことにありがとうございました。

難関を乗り越えての夢の甲子園ということで、私も実際にアルプススタンドで皆さんとともに応援いたしました。大応援団の熱気の中、大変に感動的な体験となりました。本当にありがとうございました。

今回は残念ながら惜敗ということで、試合内容については専門家の論評に任せますが、個人的には甲子園という大舞台で、初出場とは思えない頑張りを見せてくれたと、素直に感動しました。6回にこそ大量得点を浴びましたが、あとは無失点に抑え、これまで培ってきた「守備の野球」が光る場面もありました。また得点にはつながりませんでしたが、序盤では失敗を恐れず果敢に攻め、9回には「あわや!」と身を乗り出したくなる展開まで見せてもらったのですから、大変満足しています。甲子園レベルの試合運びは、今後の経験の中で身につけていけばいいこと。目標に向かって具体的な方法を考え、一步一步着実に進んできた塩尻高校野球部ですから、次はぜひ「甲子園での勝利」を目標に頑張ってもらいたいですね。新たな目標もでき、今回の出場はかけがえのない財産になったと思います。塩尻高校野球部の皆さん、このたびは甲子園出場お疲れさまでした。

また塩尻高等学校を始めとする学校関係者の皆さん、各方面

への調整お疲れさまでした。なにしろ初出場ということで、時間も、経験も、ノウハウも何もない状況の中、塩尻と東京でよく連絡を取り合って、広報の対応や応援バスの手配などを迅速に行っていただき、バス52台、総勢約2,150名にものぼる大応援団を編成できました。兵庫県立西宮今津高等学校の吹奏楽部の皆さんにもお手伝いいただいて、晴れの舞台にふさわしい応援を展開できたと思います。

さらに今回は、東急グループの関係各位からも、さまざまな形でご支援、ご協力をいただきました。この場を借りて厚くお礼申し上げます。こちらから協力をお願いする前から、「待っていました!」とばかりにご支援の手がどんどん差しのべられて、驚くやら感激するやら。突然もたらされた「甲子園出場」という出来事を前に、都市大グループとそれを取り巻く人々が一致団結し、盛りたて、一体感を醸成できました。そのつながりの深さを再認識することができたという点においても、大変意義のあるものだったと思います。

大舞台にも臆することなく健闘を見せてくれた選手たち、スクールカラーでアルプススタンドを埋め尽くした大応援団、また仲間のつながりを大切に、それを陰で支えてくれた人々、このすべてがまさに、塩尻の、そして都市大グループの全員野球の成果として、大変誇らしく思えた1日でした。



東京都市大学塩尻高等学校

河西靖男校長

2011年の夏、悲願の甲子園初出場を達成することができました。声をかぎりに声援してくださった方々や物心両面で多大なご支援をいただいた方々に厚く御礼を申し上げます。

さて、新井孝行教諭を監督に迎えて4年。悲願は一朝一夕に達成できるものではありませんでした。辛酸を何度もなめながら臥薪嘗胆し、負けじ魂を燃やし、熟慮し、目標に向かって決然と立ちあがる勇気を持たなければなりません。今回の甲子園出場の背景には、創立者五島慶太先生に対する感謝と誓い、新井監督の機に応じた適切な判断、荻原義正部長・降旗武彦副部長、降旗喜一・柳瀬伸彦両顧問との綿密な連携、主将古谷拓幹君を中心にした選手の強き執念と団結、バッテリーを組んだ相原雅君・金子豪君左右両投手と捕手の古谷君との絶妙な配球と賢明な対応、選手全員の桜梅桃李の輝きなど、勝利への要素が見事

に連携して強き団結が生まれたことを痛感するのであります。甲子園では選手一人一人が地に足をつけ、強豪九州の明豊高校を相手に堂々と戦ったその戦いぶりを見て、日々の鍛錬がどれほど大事であるかを痛感いたしました。結果は3-6で敗れはしましたが、0-6で迎えた8・9回に見事3点を返し、最後まで諦めない粘りのチームスローガンである「築け伝統、燃やせ夢への執念」を如何なく発揮できたと思います。

最終的には、甲子園出場の経験を契機として、すべての生徒が「人生の甲子園」で、強く、賢く、朗らかに、勝利の人生を築いていけるよう祈ってまいります。今後ともご支援のほどよろしくお願いいたします。



学校法人 五島育英会について



五島育英会は、東京都市大学グループの学校8校（大学1校、高等学校3校、中学校2校、小学校1校、幼稚園1園）と自動車学校を運営する学校法人です。

「学園の総合力を発揮して健全な精神と豊かな教養を培い、未来を見つめた人材を育成する」という教育理念のもと、高大連携や一貫教育など学校間の連携を強めながら、幼児教育から高等教育までの充実した理念と研究活動を展開しています。

東京都市大学

東京都市大学附属中学校・高等学校
東京都市大学等々力中学校・高等学校
東京都市大学塩尻高等学校
東京都市大学附属小学校
東京都市大学二子幼稚園
東急自動車学校

御 礼

拝啓 ますますご清栄のこととお喜び申し上げます

今夏の東京都市大学塩尻高等学校野球部の第九十三回全国高等学校野球選手権大会への初出場に對しまして、厚いご支援ご芳志を賜り誠にありがとうございました。

甲子園大会では大会七日目の第一試合に出場し、大分県代表の強豪明豊高等学校との対戦になりました。中盤までは一步も引かないゲームを展開し、六回に得点を許したものの、最終回には長野県大会決勝の逆転劇を思わせる素晴らしい追い上げを見せてくれました。残念ながら、力及ばず三対六で敗退いたしました。選手たちは最後まで都市大塩尻高校の野球部らしさを全国の舞台で発揮してくれました。

大会当日は、早朝より駆けつけてくださいました応援の皆様で、一塁側アルプススタンドは満員となり、東京都市大学グループのスクールカラーであるTCUBブルーで埋め尽くされ、皆様一体となつての力強い応援を送っていただきました。正にグループの結束力を目の当たりにした感動的な光景でした。素晴らしい応援を送ることでできましたこと、重ねて御礼申し上げます。

この度の東京都市大学塩尻高等学校の甲子園出場を機に東京都市大学グループのなお一層の充実と更なる伝統を築いて参ります。

なお、ご支援いただきました皆様への感謝の気持ちとして、ささやかではありますが出場記念の品をお送りさせていただきますので、ご笑納いただければ幸いに存じます。

皆様方のますますのご健勝と、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますよう心からお願い申し上げ、御礼の挨拶とさせていただきます。

敬 具

平成二十三年九月

学校法人五島育英会

理事長 安達 功

東京都市大学塩尻高等学校

校長 河西 靖男



第93回全国高等学校野球選手権大会

出場記念



東京都市大学塩尻高等学校